

ゆっくりでいいんじゃ

石垣明美

我が家は小高い山の麓にある。細い登山道に面した50坪（165・28平方メートル）ほどの空き地を持つ。子育てに忙しかった頃は草ぼうぼうのままにしていたが、子どもの手も離れた頃、そこに花を植えようと思い立った。

小さなアジサイの苗を5株、買ってきた。さて、どこに植えようか。草をかき分けながら考えた。

夏には汗を拭きながら、冬には白い息を吐きながら、毎日、山に登る老夫婦がいる。

そうだあの老夫婦に見えるように植えよう。

場所を決めると、雑草を取り、耕し、肥料をまいて、アジサイを植えた。続いて、ユリのような花の甘草やラベンダーも植えた。

植物を植えたところだけを守るように草をひき、世話をする、マイペースな庭造りだ。無理はするまい。それでも、範囲を少しずつ広げ、ボタンやサザンカ、ギボウシなども植えた。

ある日、あの老夫婦がいつものように通りかかった。それまではあいさつを交わすだけだったが、その日は足を留めて「よう頑張られるなあ」と声をかけてくれた。

「はい、でも、なかなか雑草の勢いに追いつきません」と答えると、おじいさんは「少しずつでいいんじゃ。これでいいんじゃ。通るたびにどんな植物が増えるのか楽しみなんじゃ」と顔をほころばせる。

それからは、そのご夫婦と会うたびに、言葉を交わすようになって

た。いつしかそのご夫婦に励まされている自分に気がついた。

「これでいいんじゃ、ゆっくりで」「さて、今日は何を植えたかな」

「そこに植えてある、ほれ、その植物はなんていう花かな」

そう言われる度に、疲労した身体と心が救われて、次には何を植えようかなと思うのだった。

「この植物たちを見てくれていると思うと、励まされます」と気持ち言葉をにして伝えた。ご夫婦は声をそろえて「いやいや、私たちこそ、励まされて山に登れるんじゃよ」と。

思いがけない言葉だった。通りすがりのご縁だけれど、知らず知らずのうちに励まし励まされていたのか。心がポツと温かくなった。

ゆっくりと一歩ずつ登って行く老夫婦と、自分のペースで植物を育てている私と、明日もまた、うれしく言葉を交わすだろう。

作者 石垣明美 題名 ゆっくりでいいんじゃ

山陽新聞夕刊エッセー 2019.10.03